

仏教の歴史的な背景ですが、インドから中国・朝鮮に伝わり、そして 2500 年余りの歳月を経て、日本へと伝わってくる間に色々と変化して、今、現在の教えがあります。鑒真の仏教の教えは、全体的には、日本には根付か無かったが、真の教えは、何ら変わっては無いし、**最澄の天台宗・空海の真言密教**などにより変化したものが伝わり、**法然上人の浄土宗・親鸞聖人浄土真宗**と伝わっている今日です。

禪宗は達磨大師を開祖として、臨済宗の栄西・曹洞宗の道元らによって伝えられてきました。

### 鑒真和上 律宗の開祖 688 年～763 年

688 年揚州に生れる。

唐の時代の揚州の町は、大運河の拠点で大都会であり、国際的、文化的町でもありました。

長年、道教との対立してきた、仏教徒に対して、良き時代の到来でもありました。

**701 年鑒真 14 歳** 出家 (沙弥 (さみ))・揚州大雲寺の智満 (ちまん) 禪師について受戒し禪の修行をしました。

沙弥として正式な僧になる前に戒律守らなくてははいけません、代表的な戒律は

- ① 殺生をしない。②盗みをしない。③性行為をしない。④嘘をつかない。⑤酒を飲まない。⑥花で身を飾ったり、体に香油を塗らない。⑦歌舞や演劇などを行ったり、見聞きしない。⑧りっぱな飾り付きの腰掛を使わない。⑨朝食・昼食のほかに、食事をとらない。⑩金銀や宝物を持たない。

これ以外にも沙弥の戒律は 72 の項目があります。

**705 年鑒真 18 歳**の時に高僧道岸より菩薩戒を受けました。

戒律は小乗仏教で釈迦が弟子達によって示された。小乗仏教の戒律は、個人が修行を通じて悟りを開き、救われん事を目標としています。

大乘仏教では、小乗仏教の、個人の悟りを求めるだけでは満足せず、自分を含めすべての生き物が救われん事を目指します。他人のため尽くす行いですが、この行いに努め、将来、悟りを開いて仏になる事を望む人が『菩薩』にほかなりません。

**707 年鑒真 20 歳**から 26 歳まで洛陽・長安へ遊学して律学の研究にふけていました。

**708 年**長安の實際寺で弘景 (智者大師智顛の流れを汲む) を師として授戒。具足戒受け、正式な僧になりました。

#### 鑒真が学んだ分野は

第一、南山宗 道宣は南山宗の開祖 師は弘景・道岸・融濟 (ゆうさい)

第二、相部宗の法礪 (ほうれい)

第三、天台宗 龍樹、慧思・恵文 智者大師、智顛

菩薩戒は、大乘仏教が小乗仏教の考えを取り入れ中国で考案された物であります。基本的には釈迦の悟り後の教えです。梵天が現れ衆生に説くよう繰り返し強く要請された教えです。

**713 年鑒真 26 歳** 始めて講座に上がり津疏 (りっしょ) を講ずる。その後、鑒真の活動はめざましい、戒律の講座を開く事 130 回、寺を建てたり、仏像を造る事は数え切れないほどです、一切経を写本する事、三部、三万三千巻や又、得度させたり、戒律を受けた弟子は、四万人余りで、門下生は揚州・都の長安だけではなく、各地に及び唐に於いて高い地位の僧であった。袈裟を 2 千枚も作って山西省の五台山に寄附している、貧民や病人の救済事業を起すなど、社会事業方面でも活躍していた。鑒真の活躍ぶりは、大変なものであった。

鑒真の弟子で、実践に活躍した名僧を上げると。

祥彦 (しょうげん)・道金・璿光 (せんこう)・希瑜 (きゆ)・法進 (はつしん)・乾印・神邕 (しんよう)・法蔵・志恩・靈祐 (れいゆう)・明烈 (しょうれつ)・明債・璿真 (せんしん)・恵琮 (えそう)・法雲 (ほううん) などなど、多くの名僧達があります。

**717 年鑒真 30 歳**

鑒真和上の数々のエピソード

揚州の崇福寺（そうふくじ）の寺主、**明演**（めいえん）が鑿真の所に来て「崇福寺の修理依頼で、寄附を集める為に鑿真が、戒律の講座や授戒会をもよおしてはいただけませんか」と願ったので、崇福寺で大律を講じ、資金を集めました。金堂の修理をはじめた時の事であり、堂のハリに使う材木の直径四尺八寸（約 1m60cm）巨木を運河で運んで来たが、岸が高く上げる事が出来なかった。すると、何処からともなく強い牛が一頭現れて、材木を引いて寺に運んでくれたが、運び終わると同時に、牛はたおれて死んでしまった。その夜、大工の棟梁が夢に金剛力が現れて、わしが、お堂の建築を手伝ったのだと告げた。この話しは、鑿真の弟子の**思託**が書いた『延暦僧録』（えんりやくそうろく）の伝える所ですが、同じ様な実話は、沢山あります。鑿真の寺院の造営には、数多く貢献しているし、いかに寺院を中心とする造型美術の作成に関心と経験が深かったか良く判ります。

日本の現状、百済の王国の使いで仏教が伝えられたのは 538 年で 200 年近く、仏教は朝廷や豪族の信仰を得て、確かな地位を築くが 624 年頃には、寺院が 46 箇所。僧、僧尼が 1385 人、でも、彼らは、**本当の僧と言えなかった**。

一人の僧が祖父を切り殺す事件が発生しました。戒法を守るべき僧が、この様な事件を起したのに、衝撃を受けた、寺や僧尼の実態を調査、犯人の僧は、**普通の俗人と同じように、裁かれ処罰されました**。

僧は仏教の戒律によって僧団内で裁かれるのが大原則ですが、**列島の僧団が成立しておらず、戒律にそって営まれる世界が自立していなかった**。この事件を機に、**僧尼の統制機関が創設**されました。

日本で最初に正式に**受戒**し、出家したのは **588 年百済に出かけ、善信尼（ぜんしん）・禅蔵尼（ぜんぞう）・恵善尼（えぜん）** の 3 人の女性であった。

日本では、百姓の流亡を戒む（いましむ）ために、百姓がみだりに僧尼となる事を禁じ、僧尼に濫悪（らんあく）を禁じた。

686 年 授戒の制度が整い機能をしだしたが、朝廷は、本格的に導入しようとしたがスムーズに行かず、留学僧に、たよるなどしていました。

本来、自発的に運営されるはずの戒津も、朝廷からの押し付けで、戒津への理解や積極的な受け入れが無かった。多くの僧尼たちは、正式な受戒を経ておらず、たとえ『四分律』が輸入されていたとしても、読破する人がいなかった。と**疑然**（ぎょうねん）が述べている。

**行基**（ぎょうき）（668～749）は、学僧と言うよりは、実践型の宗教家で、身を持って人民の間に投じ、民衆の苦悩は、己の苦悩と感じたのである。宗教の求める所の深遠（しんえん）な哲理（てつり）や来世の異の安楽浄土よりも、病苦（びょうく）の除去であり、日々の生活の安定で有ると考えていたのであります。病者には薬を与え、医療をほどこした。悩めるもののためには接禱（せつとう）もしたし、橋のない川には、橋を掛け、干ばつの為には池を掘り、宿のない旅人のためには、宿を造り、舟行（しゅうこう）の為には港を開き、道路に遺棄（いき）された死骸を葬るなど社会救済事業に没頭しました。

### 行基の禁止令

- 1、かつてに出家する事。
- 2、寺院の外で、集団で布教する事。
- 3、許可なく托鉢する事。
- 4、間違った教えを説いて民衆を惑わし、生業を捨てるよう扇動する事、なのである。

### 日本政府が戒師を招いた理由（鑿真和上）

**732 年**日本政府は 14 年ぶりに遣唐使を派遣する事になるのには、政治的背景と、日本が唐より正式な僧を招聘したかった、理由については、仏教伝来以後、聖武天皇の時代に至っても未だに三師七証による正式な僧侶が無いし、十人以上そろった事がないため、正式な授戒が出来なかったため、日本の僧尼の墮落は七世紀の初期頃から始まっていました。

また、当時、僧・尼は政府の課役（かやく）を免除される特典があったため、争って僧・尼になった。**私度僧**まで出てきていたため、政治家たちは、ボツボツ取締りの手を加えようとしていました。

**興福寺の隆尊**（りゅうそん）・**道慈**の僧らは、日本と唐の仏教界に大きな落差があることに体感し危機感を抱いていた。

隆尊は、唐の戒師の招聘のきっかけを作り、道慈が唐から帰国後は、太政官の首班の立場にあったので、舍人親王（とねりしんのう）に戒師を唐から招聘することを提案した。さっそく聖武天皇に願い出ました。そして、舍人親王の命により、授戒の師僧たるべき有志資格者を唐に求めるために、733年8月17日、十五年ぶりに遣唐使派遣を決定しました。

総勢五百九十四人、四隻の大船団であった。大使：多治比広成（たじひのひろなり） 副使：中臣名代（なかとみのなしろ） 判官・秦野朝元（はたのちょうげん） 平群広成（へいぐんのひろなり）らが任命されました。興福寺の栄叡・（ようえい）・普照と玄朗、戒融（かいゆう）らは唐より戒律の師僧たちを招聘する任務を背負わされました。

734年遣唐使は難波津（なにわづ）を出航し、九州太宰府に寄港し、五島列島を最後に、東シナ海を一気に横断し中国大陸、揚州を目指しました。

揚子江の河口に入ると、遣唐使一行が蘇州（そしゅう）に漂着した、その事を蘇州の刺史（しし）は、ただちに長安の玄宗皇帝に伝えた、この知らせを受けるや、すぐに使者を送り、一行を長安まで案内させて、壮大な歓迎の宴を開き温かい歓迎を受けた。

唐の政府に絁（あしぎぬ）二百匹・水織絁（みずおりのあしぎぬ）二百匹を献じました。

前回の留学生、阿倍仲麻呂（なかまろ）、吉備真備（きびのまきび）、玄昉（げんぼう）達も招かれていました。

栄叡（ようえい）・普照は大福先寺の僧の定賓（じょうひん）より具足戒を受けました。

栄叡・普照は大福先寺に居る間に、律の僧道璿（どうせん）と知り合いになった。道璿は律に明るく、天台宗・華嚴宗をも良く知った人物で、学殖と人柄を信じた栄叡たちは、取り合えず、道璿・菩提仙那（ぼだいせんな）（インド人） 仏哲（ベトナム人）、この3人に日本に行って戒律を伝授してくれるように交渉し日本への招聘が受け入れられました。734年11月出航し736年の春に日本に着いた。

阿倍仲麻呂（なかまろ）、吉備真備（きびのまきび）、僧玄昉（げんぼう） 羽栗吉麻呂（はぐりのよしまろ）四人は今回の遣唐船で帰国することになっていた。

阿倍仲麻呂は玄宗皇帝に大唐国の官吏として勤めていました。

玄宗皇帝は、阿倍仲麻呂にまさか、『この度の遣唐使と共に日本に帰るのではないだろうな』『貴殿の左補闕（さほけつ）としての働きは、極めて優れている、このまま続けて朕（チン）の側近として大唐国に残ってくれ』と言われ、阿倍仲麻呂は『ありがたきお言葉、喜んで引き続きお仕え申し上げます。日本へ帰るつもりなど毛頭ございません』と言った。そこまで皇帝に言われたら、阿倍仲麻呂はとても帰国など出来るものではなかった。

阿倍仲麻呂は、羽栗吉麻呂に、私は玄宗皇帝の命令につき唐に残らなければならなくなったが、貴殿は帰国するがよい』と、言った。羽栗吉麻呂は「いえ、阿倍仲麻呂殿が唐に残るのであれば、私ももちろん僊従（けんじゅう）として残ります」「主人を置いて、自分達だけ帰るわけにはいきません」と言った。

阿倍仲麻呂は吉麻呂に『もう僊従（けんじゅう）の仕事は十分果たしてくれた。家族をつれて日本に帰りなさい。今、帰らなければ、二十年後になってしまう』と自分自身に言い聞かせるかのように言いました。

阿倍仲麻呂は吉麻呂に言った「そうだ、唐の女性を日本に連れていくことは、法で禁止されている。一度、高力士（こうりきし）とよい手だてがないかどうか相談し、頼んでみよう、妻も子供もつれて家族皆で帰るのが一番よい、妻は「尼僧にでも化けさせて行ったらよいのではないか」「吉麻呂殿、もう十七年間も仕えてくれたのだ。優秀な二人の息子も年頃だ、日本に連れて帰り、日本で学ばせなさい。」再度、言いました。

吉備真備（きびのまきび）と僧玄昉は帰国の準備で忙しかった。十七年間学んだ研鑽（けんさん）の集大成として持って帰りたい物が余りにも多く、その準備で殺気立っていました。

二人は金目の物は全て売り払って、本を買いあさった。「持って帰りたい本が山ほどある」彼等の部屋は本の山で足の置き場もないほどでありました。

羽栗吉麻呂は、十七年振りに故国の土を踏めると喜びで、気が舞い上がっていました。

吉備真備は『唐礼（とうれい）』、『漢書（かんじょ）』を初めとして兵法、天文学、音楽に至るまで百五十三巻の貴重な書物を用意しました。

「技術の先端を行く、弓、矢、鎧等の新兵器も持って帰りたい」「俺は五十巻の經典を持って帰るぞ。船は沈まないだろうな、仏像も仏画も持って帰りたい」大忙しでありました。

高力士、684年～762年は、中国唐代の宦官。唐の第6代皇帝玄宗の腹心として仕え、権勢を振るった人です。

遣唐使一行は長期留学生を残して、734年11月、四隻そろって、蘇州より帰国の途についた。

第一船には、大使多治比広成（たじひのひろなり）が乗っていた。この船に乗っていたのは吉備真備、玄昉、そして羽粟一家四人らで有りました。

大海に出て三日目、嵐に遭った船は上海の南、現在の浙江省台州（たいしゅう）（舟山）辺りの海岸に吹き戻されて漂着した。しかし、再び出航し、種子島にたどり着き、そして、紀州に到達しました。735年の春に全員無事奈良に到着しました。

第二船には副使 中臣名代（なかとみのなしろ）が乗っていた。この船にはたくさんの異邦人（いほうじん）が同船していたのは、中国出身の道璿とインド出身の菩提仙那、ベトナム出身の仏哲達であった。

船は南へと漂流し、インドシナまで流された。同船していた仏哲の取り計らいで、翌年の春、洛陽に戻ることが出来ました。一行は唐の船に乗り換え、翌年の春736年に無事日本に帰ることが出来ました。

第三船は判官平群広成（へぐりのひろなり）が指揮を取っていた。天涯孤独になった秦朝元（はたの あさもと）は、当初、唐に残るつもりだったが、第三船に乗っていた。第二船と同様に強い南の季節風で南へと流され、数日後、右舷前方に、近くに島を発見（今の海南島）し漂着したが734年に日本に着いています。

第四船は蘇州の港を出港してから全く音沙汰がなかった。おおかた漂流、難破し大海のもくずと消えたのだろうと都では噂されていたが、しかし、第四船も、また翌年の秋、五島列島に漂着した。発見した漁師が報告した事は「幽霊船だ。しかし生きている人もいる。阿鼻叫喚（あびきょうかん）まるで生き地獄のようだ」20人から30人の乗船者が泣きわめいていました。

遣唐使が日本に持って帰った物、全てが価値のある物ばかりではなかった。これが悪性の疫病であった。今の天然痘であろう。あつと言う間に太宰府から日本全国に万延しました。日本には過去に経験がなく、治療の薬もなかった。神仏に拜む以外、道がなかった。疫病は遂に都に入り込み、猛威を振るったそうです。

栄叡・普照は道璿・菩提仙那・仏哲の戒師が来日しただけでは、どうにもならないと思っていましたが、二人は、長安・洛陽で勉強生活を送っている内に9年の歳月が過ぎてしまった、しかも戒師として日本に招くべき名僧は、まだ見当らなかったのです。

二人の生活は、唐の政府から毎年、一人に絹二十五匹を賜り、別に時服・月料をもらっていた、まずまずの生活だった。留学僧の滞在期間は9年間と定められており、外交特権を失って行動の自由を失ってしまうので早期帰国を決意しました。

大明寺5世紀中ごろの南北朝時代に建てられました。（大明寺はDVDに有ります）



とっても大きな三層の大雄寶殿



大きな釈迦三尊立派です



山門殿には旅立ちの鑑真和尚



境内の一番奥には鑑真堂



大きな舍利塔 栖灵塔



江沢民が虫眼鏡で舍利仏を見ています



最上階からの大明寺全景



鑑真紀念堂への道のり



大きな鑑真園書館

### 第1次の日本への渡航の計画協力者

栄叡・普照は、僧道抗は玄宗皇帝に20年間使えた李林甫(りりんぽ)の兄である林宗と親しかったので、この手ずるにより、李林甫(りりんぽ)に面会し、日本への渡航についての便宜供与を依頼する事が出来た。

李林甫は、此れを承知したのみならず、『表向きは、天台山国清寺へ奉納するものを持って行くのだが、陸路に行くのは面倒なので、海路から行くのだと言っていた方が良い。もし、運よく風が得られたら、そのまま日本へ渡航すればいいし、万一、風の具合が悪くて中国の海岸に吹き戻されるような事が有っても、天台山へ行くのだと言い、公文書に証拠が有るからと示せば、咎め(とがめ)は無い』と周到な示唆(しさ)を与えてくれ、国法を犯して海外渡航をやるので林甫はこうした配慮の助言をしてくれた事や、林甫は、揚州で自分の甥あてに、一行のために渡海用の船を造ってやるように指図してくれました。甥は林甫の手紙を見て特別に船を造り食料その他の準備もしてくれました。

そして、戒津の権威とされ仏教界に強い影響力もつ、鑒真和上に依頼するよりほかに無いと考えた。二人は長安大安国寺の鑒真の弟子の道抗に、日本に行ってくれる人を頼むために、鑒真と会う事を頼みました。

742年鑒真は55歳 栄叡・普照は、揚州大明寺で鑒真の講義中に訪れ、伝津、授戒のため日本に渡航せん事をお願いに上がりました。

二人は、先に、長安の澄観(ちょうかん)・洛陽の徳清(とくせい)・朝鮮の如海三人と日本の留学僧玄朗・玄法と、先に日本に行った道璿・菩提仙那・仏哲達が居るので、自分たち二人を加えれば、どうやら三師七証は成立すると考え、初めは、鑒真に「日本に戒律を伝える為に、和上、どうか御門下の方々に、御命じになって私と一緒に行くように、おっしゃってください」との頼み方をしています。

栄叡は本意曰く

【仏教は東に伝って日本に至りましたが、仏の教えがあるだけで、それを伝える人がいません。日本には、昔、聖徳太子という皇子(みこ)がおられました、2百年後に仏教が盛んになるだろうと言われたそうですが、今は、まさに、そのめぐり合わせに当たっています。どうか日本に来て、指導して下さいますように。】とお願いいたしました。

これに対し鑒真は、高僧慧思と長屋親王のエピソードを用いて答えています。

【昔、慧思は亡くなった後、倭(わ)国の王子に生まれ変わり、仏教を盛んにして、人々を救ったと聞く。また、日本の長屋親王は、仏教を尊び、袈裟を千領作って、中国の僧侶に喜捨(きしゃ)した。その袈裟の縁には、四字の句を連ねて、『山川は域を異にすれども、風月は天を同じくす。これを仏子に寄せ、共に

『来縁を結ばん』日本は仏教の盛んになるのに、まことに縁のある国に違いない。今、ここに集った仲間の中に、この遠くからの要請に応じて、仏法を伝えようとする者はいないかと、弟子たちに聞きました。天台宗の祖師で高僧**慧思**の学統が**鑒真**自身につながっています。

『倭国(わこく)の王子』こそ、聖徳太子と**鑒真**は受け取ったに違いない。(慧思の生まれ変わりが聖徳太子であります)

弟子たちは、しばらく黙っていたが、弟子の**祥彦**(しょうげん)は、【日本は大変遠く、渡航しても命が助かるのは難しいと思います。青海原は広大で、百人に一人もたどり着く者はいません。そもそも人間に生れつくのは、むずかしく、しかも世界の中心として文化の栄える中国に生れることは、さらにむずかしいことです。我々は修行途中で、悟りにも至っておりません。それで皆、黙って応えないのです】と答えた。

**鑒真**は、答えて、次のように言います。【これは、仏教に関わることだ。どうして命を惜しもうか。皆が行かないなら、私が行く】と言いました。

これを聞いて、**祥彦**は【大和上が行かれるなら、お供します】と言いました、そして、**道抗・徳清・澄観**(ちょうかん)・**如海・神頃**(しんけい)・**崇忍・靈粲**(れいさん)・**明烈・道黙**(どうもく)・**道因・法蔵・老静・道翼**(どうよく)・**幽巖**(ゆうごん)・**思託**ら全員で21人が心を同じくして和上にしたがって行きたいと願ひ出ました。

**鑒真**は、古代の人である事を忘れてはならないと思います。合理的な見方だけでは解けない動機が、**鑒真**を動かしたのではないかという事です。

**鑒真**は常々、天台宗の祖、**慧思**が東方に生まれ変わって法を説いた事を信じていました。ここで、**鑒真**は、まさにその生まれ変わりといえる皇子(みこ)がいた事を確信したにちがい有りません。

**慧思**の後を受けて、**海東**に**戒津**を伝え、さらに仏教を起さなければ、との思いが**鑒真**を、かきたてたとしても不思議ではありませんでした。

**栄叡・普照**は、意外な発展に、**驚喜**しました。

743年**鑒真**56歳**第一次渡航計画**は、その年の夏の事です、天台山の国清寺に**供養**の品々を届けるとの名目で船も出来上がり、器材など積み込まれました。

いざ出発となった時、仲間割れが起きます、**道抗**が弟子の新羅出身の**如海**(じょかい)におまえなど、この一行に加わる資格がないと非難されたため、怒った、**如海**が港の役人に、「日本僧は実は海賊だ」と嘘の密告をしたため、日本の僧の**栄叡・普照・玄朗・玄法**らは、開元寺で逮捕され、四月から八月まで投獄でつらい目にあいました。**鑒真**は留め置かれました。

又、日本の留学僧の**玄朗・玄法**の二人は、これから国へ帰ると言い残して別れ、その後の消息は不明ですが、**玄朗**は、**普照**と六次帰国直前に会っています。

743年11月**第二次渡航計画**の試みは**鑒真**が、**銭八十貫**を出して、**軍用船一隻**を買い、船員十八名をやとい、周到的準備の上で、出航した。

同行者は**祥彦・道興・徳清・思託・栄叡・普照**ら十七人の他に、玉作工・画家・彫刻家・刺繍(ししゅう)工・石碑(せきひ)工などすべてで百八十五人の集団です。

長安の河口を出た所で、激しい暴風に遭い、船は破損しますが、**修理し再度、出航**しますが、座礁し使えなくなった。漂着した島が舟山の普陀山でした、上陸した一行は、飢えと乾きにおびやきながら、助けを待つしかなかった、三日たって嵐も去り、島の漁民に無事救助され、五日後に一旦、明州の**寧波**の**阿育王寺**に収容され、休養する事になった。**阿育王寺**はDVDに記載しています。

この時に積み込まれた品物は、

**食料品**は、**苳脂紅緑米**(れいし) 一百石・**甜鼓**(てんし)(味噌の類) 三十石・**牛蘇**(ヨーグルト) 百八十斤・**麵**五十石・**乾胡餅**(かんこへい) 二車・**乾蒸餅**(かんじょうぺい) 一車・**乾薄餅**(かんはくぺい) 一万番・**捻頭**(ねんとう) 一半車

仏像・経典・仏具・医薬品・香料・青銭・正炉銭・紫辺銭・羅の襪頭（ぼくとう）・麻靴などが用意された。第三次の時には、味噌・納豆・砂糖なども用意された。

744年 57歳、**第三次渡航計画**、鑑真が越州（えっしゅう）・杭州・湖州・宣州（せんしゅう）など講義や授戒を済ませ（渡航の資金集め）、阿育王寺に戻ると、栄叡が鑑真を日本に連れ去ろうとしているという越州（えつ）の僧の訴えが役所に届けたため栄叡が拘禁（こうきん）されたが、杭州で病死したという事にして、やっと開放されます。実行に着手できないうちに挫折してしまうのでした。

744年**第四次渡航計画**、鑑真は弟子の**法進**らを福建省福州に派遣し、**船**を買い、必要な物資を調達しました。その年の冬、福建省福州を目指して**鑑真・祥彦・栄叡・普照・思託**ら三十余人をひきいて阿育王寺を後にして、陸路の旅に出ます。人目をごまかすため、**天台山への巡礼を装って、出発**しますが、険しい峰々と吹雪に合い、一行の苦しみは一通りでは有りませんでした。そして**天台山国清寺**に着きました。

鑑真たちは、天台山国清寺を後にして、**渡航船**の買って有る、福州へ向かうが、途中の**禅林寺**に行き、結局は官憲の知るところとなり、福州に至った所で捕まってしまいます。**靈祐**が鑑真の**安否を気遣って渡航阻止**を役人へ訴えたため、官吏に出航を差し止めされ、失敗しました。

これほど、妨害や支障が有っても、鑑真の意志は変わりませんでした。

**鑑真**は**靈祐**達が、自分のことを心配してくれる気持ちはわかる。しかし自分が**決行**しようとした事は**仏法のためであり、民衆のためである**。そのためには『自分の一身などは小さな問題である。人間は自分の志した**大事の完成**にこそ、**生命を賭けるべきだ**、**靈祐**の心配は、**児女（じじょ）の情けに過ぎない**。かえって自分の志を殺すものである』と言われた。

靈祐は、謝り懺悔して、きげんを直されるように願い、毎晩八時頃から朝の四時頃まで立ったなりに、罪を謝する事六十日に及んだ。

その後の3年間は渡航に関する事は、停滞していました。

749年鑑真は63歳6月**第五次渡航計画**。

栄叡が再び大明寺の鑑真を訪れ、栄叡・普照は懇願すると、鑑真は5回目の渡日を決意する。船やその他のものの準備は、第二次計画と似ていた。

このたびは、人災は無かったが、恐るべき天才に遭遇してしまいました。

大和上は改めて方法を講じた、同行者は、**祥彦・神倉・光演・頓悟・道祖・如高・徳清・日悟・栄叡・普照・思託**ら僧は皆で14人と、それに、説得して参加させた**水手（かこ）**（今の水兵）、十八人とその他同行したいと願うもの三十五人であった。

**崇福寺**（そうふくじ）を出て揚州の新河に行き就航した、大江を出て東に下って常州の狼山の港まで来ると、悪天候に合い島々を、グルグルと廻らされ、翌日になると都合よく舟山の普陀山に着く事が出来た。ここで風を待つ事一ヵ月で十月になると風向きが良くなったので普陀山を出航したが、大海へ出て行くにつれて強い風が吹き出し海は大荒れ命からがらの日々が続き、巨大な海蛇や飛魚や海鳥など、出現する大洋です。数々の苦難や不思議な出来事を体験して十四日間も東シナ海の海を吹き流されて漂着したのが中国の南のはての**海南島**です。

**馮崇債**（ふうしゅうさい）（当時の官長）は鑑真和上の船が漂着した事を聞くと、兵、四百人余りを迎えによこして州城へ案内させ歓迎を受けて、鑑真たちは**海南島**で一年過ごしました。

**馮崇債**は**高力士**の従兄弟です。

**馮崇債**との関係は、空海の弟子で僧円明の父、豊田丸は紀州の豪族である。馮崇債は、豊田は居ないかと皆に聞いたが居ないと言うと、とても残念がっていた。

また、734年の帰国路の時の判官**平群広成**（へぐりのひろなり）が指揮を取っていた遣唐船の**第三船**も日本に向かう時に漂着した島でもあります。

**馮崇債**は、日本と、鑑真は特に好意を持っていた。大和上一行は、**大雲寺**にしばらく移住する事になった。**大雲寺**の仏殿は、こわれたままだったのを、僧たちの衣類や、日本へ持って行うとしていた**仏像・仏具・**

經典などを役立て修築しました。

鑑真は、当地の**大雲寺**（現在は、南山寺と呼ばれている）に1年滞留している間に、数々の医薬の知識を

伝えた。土地の豪族や、中央から来た役人の歓迎を受け、物珍しい海南島の風土で英気を養った。

海南島には、鑑真を顕彰（けんしょう）する。遺跡が残されています。

鑑真は揚州に戻るため海南島を離れた。

**馮崇債**は、武装した兵八百人余りをともない、揚州への帰りの徒にしばらく、護衛をかねて案内した。

例によって講義や授戒を行いながら、各地で歓迎、援助されながら、揚州を目指しました。

四十日余り経て万安州（まんあんしゅう）に着くと、栄叡の健康状態が悪化したため、栄叡と普照は、別に

船を仕立てて海路を崖州（がしゅう）に向い、崖州で落ち合う事にした。

鑑真は、崖州の**開元寺**が火災に合い、張大使に頼まれ再建した。

それぞれ年を取り、これまでとは違う過酷な旅を経験した一行に大きな不幸が襲いました。

端州（たんしゅう）の**龍興寺**に着いてから**栄叡**は病が重なって、志を遂げずして異郷の土と化する、事にな

ってしまった。遺骨はなくなるとこの地に葬られました。

鑑真は栄叡の死に付いては【**哀慟悲切**】（あいどうひせつ）としか記されていません。（栄叡は美濃国の出身

以外は不明）

このころ普照は途中で鑑真と別れ、**阿育王寺**向かうのです。

鑑真は、普照と別れる時に、その手をとって涙ながらに『まだ日本への渡航が実現していないのに、こ

こで普照と別れねばならないとは、たどえようもなく残念だ』と述べています。

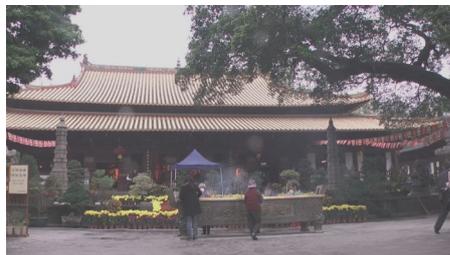
動揺（どうよう）した鑑真は広州から天竺（てんじく）へ向かおうとしたが、周囲に慰留（いりゅう）されまし

た。

広州の**大雲寺**（現在は不明・**光孝寺**の前身と思われる）に立ち寄っている。（**光孝寺**はDVDに有ります）



光孝寺の山門



大雄宝殿



慧能の銅像

五祖弘忍から**慧能**に**衣鉢**を与えられ**受け継いだ寺**で、広東省（かんとんしょう）内で最古にして最大の建造

物です。

**南華寺**にも立ち寄っている（詳細はDVDに有ります）6祖**慧能**の**即身仏**がある寺で、中国最古のミイラであ

ります。



広い境内に天王寶殿



南華禪寺豪華な山号額



蔵経閣の中には竹にかかれた般若心経

渡航の経済的原動力は、第一次計画は、**李林甫**の協力よりまず、6回目は日本の遣唐船の帰路の時であるが、

残りの4回は、鑑真の、授戒や講座による資金であります。

鑑真は日本への伝戒の志は変えてはいなかったが、日本渡航を実行するために恐らく財力が尽きて、一旦揚州に戻って再建を計らなければならなかった違いなかった。

この揚州までの帰上の間、鑑真は南方の気候や激しい疲労などにより、普照と別れる、前後から目が悪くなり、胡人（こじん（中国北方・西方の異民族））の眼科医に治療し手術したが、遂に失明してしまう。

63歳の高年齢での白内障と思われるが、当時、唐に来ていた胡人の医者は白内障の手術をよく行っていたが失敗した。白内障の手術は、古代から行われ、元来、インドで発明されたもので世界に広めたのはアラビア人である。

## 祥彦死

日本渡航にしたがう事を真っ先に表明し、第一回の渡航計画以来、鑑真のもとを離れることのなかった、祥彦が長江に向かう船の中で祥彦(しょうげん)が亡くなるのです。

自分の死期が近づいたのを悟った祥彦は、同輩の思託に、自分に死期が近いのを悟った、『和上は眠っておられるだろうか』と尋ねます。鑑真はすでにおやすみになっていましたが、思託は、鑑真お越しました。僧侶は西方に向かって、座ったまま死を迎えるのが尊ばれていますが、鑑真は祥彦を座らせ、ひじつき(座椅子)に寄り掛からせ、念仏を唱えさせます。その一声が祥彦の最期でした。

大和上は『彦、彦』と叫び、悲慟無数なり』という。南山宗の開祖、道宣の教えを受継ぐ鑑真にとっては当然の行いでした。この行為は『結跏趺座(けっかふざ)』の行為です。

鑑真は、盲人と成り、愛弟子の祥彦まで失い、一生の中で、この時ほど痛切な思いになった事は無かったであります。

鑑真は、これまでのように、經典の講義や授戒を続け各地で歓迎を受けていました。

棲霞寺(せいかじ)にも立ち寄っている、南京市(詳細はDVDに有ります)

海南島から帰ってきた鑑真たちは、大変な歓迎を受けました。以前のように龍興寺(現在は無い)に住む事になった。

## 第六次渡航計画

750年日本政府は十年ぶりに遣唐使を派遣する事になり、藤原清河大使・大伴古麻呂(おおともこのまろ)副使・吉備真備(きびのまさび)副使・藤原刷雄(さつお)・藤原仲麻呂・大伴古慈悲(こじひ)らが同行した。この度の遣唐使は、当時完成近づいていた東大寺の盧舎那仏(るしゃなぶつ)に用いるべき黄金を唐から買ってくる事が主な目的で四隻であった、内密には、今回の遣唐使派遣の目的は、新羅討伐(しらぎとうばつ)で朝鮮を支配する目的も有りました。

752年六月頃には東シナ海を横断して唐に渡り、秋には長安に着いている。

752年遣唐使達は無事に唐に到着し、普照、明州で藤原清河らに会います。長安に入った一行は、その年の秋に玄宗皇帝に面会した。玄宗は、遣唐使らの態度作法、他に異なるものを見て「日本国遣唐使一行の容貌(ようぼう)、風采(ふうさい)、作法は他とことなり、実に美しい」と言い『有機礼儀君子国』と言う号をあたえ、藤原清河は「特進」をあたえ、吉備真備(きびのまさび)、大伴古麻呂は「銀青光祿大夫(ぎんせんこうろくたいふ)」をあたえた。過去このような高い位を賜うことはなかった。大歓迎でありました。

遣唐使、藤原清河大使・大伴古麻呂・吉備真備・留学僧藤原刷雄(さつお)ら入唐してから、明州に来る事により、新たな局面を迎える事となった。

栄叡・普照らの来唐以来ほぼ10年の歳月が過ぎていた。

日本の朝廷も戒師を招く計画を捨てていませんでした。遣唐使一行は、鑑真が五度の渡航に失敗した事を聞いていました。

玄宗皇帝は、阿倍仲麻呂を案内役として、宮殿の中をくまなく拝見させることを許した。阿倍仲麻呂は、今では大唐国衛尉少卿(えいいしょうけい)(警視庁副長官にあたる)地位でありました。

## 753年10月帰国の準備

藤原清河一行は、玄宗皇帝別れの挨拶と共に、鑑真と五人の僧の名前をあげて、日本に招きたいと申し出

ますが玄宗は、許しませんでした。玄宗は『日本の君主は道教をあげていない。道士も連れて行け』困った清河は、一行の中から四人の日本人を留めて道教を学ばせる事にし、鑑真たちの招請を取り下げませんでした。

玄宗にしてみれば、日本は留学僧ばかり送り込んでくる上に、僧侶の派遣まで求めてきた、これは捨て置けないという思いがあったでしょう。

長安には、一万人余りの留学生が世界中から集まり勉強していた。しかし、逆に唐人が国外に出ることについては、厳しく規制していたのである。

しかし、願いを取り下げた使節も、それで諦めたわけではなく、藤原清河大使の意向により、船内で、国家の維新を掛けた、密談が行われました。

顔ぶれは、三十七年ぶりに帰国する、阿倍仲麻呂と藤原清河・吉備真備・普照・大伴古麻呂以上五名です。藤原清河大使は、「鑑真和上一行を日本にお連れするのを止める」事にした。これは十分考えた上での判断である。皆の了解を得たい、鑑真和上の弟子にも、和上が日本に行くことに反対する者も多く、当局に告げ口する可能性が以前にもまして高くなってきたし、唐の国禁を犯す密航者が遣唐使船にて発見されたら、日本国の正式な外交使節団として、誠に由々（ゆゆ）しき結果にもなりかねない、遣唐使は天皇の代理として、大唐国を正式訪問したので、天皇大権を移譲（いじょう）されたことを意味する、大唐国の玄宗皇帝の意に反して、国禁を犯す高僧の密航が露見したら、大きな国際問題に発展する可能性もある」と藤原清河大使は言った。

阿倍仲麻呂は、「今まで何回も、日本側からお願いしておきながら、今更やめだと、誰が、どんな面(つら)をして、高僧鑑真和上に話をするのですか……。彼らにとっても日本行きは、命がけの決断ですよ」『鑑真和上ごとき、唐きっての高僧を日本に招聘することは、極めて大切だ。特に、日本の人民に仏教の道を教え、信仰心を高め、心豊かな文化国家を作り上げるためにも彼の力が必要だ』し『鑑真により戒を授けられた弟子は、四万人を越す、唐国一の高僧が自ら危険を冒して、日本国に来て下さるなど、後にも先にもないことです。この機会を逃すことは、これからの日本国にとって大きな損失だ。何とか、決行したい』天下の文化の中心は、中国である、そして安部仲麻呂は、藤原清河大使に「出航の日をどうか七日間延ばし、11月15日の満月の未明までお願いします。私が、鑑真和上に事の成り行きを説明し、謝罪しましょう」答えました。

今回の遣唐使の目的は、先ほど述べたように、東大寺の盧舎那仏に用いるべき黄金を唐から買ってくる事が主な目的であったが、内密には、今回の遣唐使派遣の目的は、新羅討伐で朝鮮を支配することにもあった。

天平時代を代表する日本の二人の秀才、阿倍仲麻呂と吉備真備は共に多くを唐で学んでいた。

大伴古麻呂以上に、日本国の将来を思い悩み、嘆息（たんそく）せざるを得なかった。この二人の国際人は、誰よりも日本が今、鑑真和上を必要としていることを理解していました。

### 新羅討伐で朝鮮を支配する事

阿倍仲麻呂は吉備真備に願いを託した、新羅討伐で朝鮮を支配する事に対して、私が無事日本国に帰ることが出来ない場合は、天子様（聖武天皇）と藤原仲麻呂殿に新羅討伐を止めさせるように説得して欲しいのです。「日本のため、天下のためです」と阿倍仲麻呂は言った。

吉備真備は「たとえ、勝つとしても、ですか」と聞く。

阿倍仲麻呂は「もし戦いに勝ったとしても、それは一時的なことです、未来永劫に朝鮮を支配することは出来ません」

真備は「なぜですか」

阿倍仲麻呂は「渡ることさえ難しい海の向こうの国を永遠に支配することなど不可能です」

真備は「そうですね」

仲麻呂は「敗ければまだしも、勝てば更に害は大きい」

真備は「戦争に勝って、なぜ被害をかぶるのですか」

仲麻呂は「半島を征服したら、彼らの地を支配し続けるために多くの民と金が必要になります」「百年以上、支配し続けることは出来ず、いずれ敗北の時がある、その時は、多くの人民を死に追いやり、多くの金を無駄に使い、撤退した暁にはなにも得られない。残るのは敵国の民の憎しみだけです」

吉備真備は言う「仲麻呂殿は百年も先のことまで考えているのですか」いや「百年どころか、一千年先の日本国のことを憂う」のですね。

真備は我らも同じ気持ちです」「わかり申した。我が命に懸けても朝鮮討伐を阻止することを約束します」と真備が理解しました。

大伴古麻呂はいつの間にか、主戦論者が反戦論者になっていた、取りあえず会議は終わった。

万里の頂上は、中国の要塞で有るが、日本は大海が自然の要塞であります。

## 第六次渡航計画の決行

その後、普照と阿倍仲麻呂と吉備真備が会っての話し合い、普照が今迄の経緯を話した。

鑑真に渡航をお願いした時の事、5度の渡航の失敗、栄叡の死、祥彦の死、鑑真の失明などなど、涙ながらに話した。「苦節十年、ああ、六度目の挑戦もまただめか」普照は言った。

阿倍仲麻呂は言った、普照殿、私は鑑真和上をなんとしても、日本に連れていかなければならないと考えています。玄宗皇帝は極めて寛大な天子です。面と向かって天子の意に反するのは恐れ多いことですが、役人共に気づかれずに、うまく唐を脱出さえ出来れば、そのことが後でわかったとしても、それほど大きな国際問題に発展する可能性は無いと確信しています。『故国のため、和上一行を日本に連れて行きましょ』阿倍仲麻呂が普照を励ますように肩をたたいて、はっきりと言った。

古麻呂は、仲麻呂がそんな大それたことを考えているとは思わず、びっくりしました。

大伴古麻呂は、「単独でも命に懸けて、鑑真和上一行を日本に密航させるぞ。日本国のためだ」と、すでに腹に決めていました。

阿倍仲麻呂は、ただちに行動を開始し、思託に相談しました。

阿部仲麻呂と大伴古麻呂と思託3人は、三日後の朝、鑑真和上一行が泊まっている龍興寺を訪れる事にしました。

鑑真和上一行の密航は、我ら三人（阿部仲麻呂・大伴古麻呂・思託）で決行しようと言ひ、藤原清河大使、吉備真備は知らないことにして、迷惑を掛けないようにしよう」と約束し三人は別れました。

阿部仲麻呂はもしも、事が失敗した時には、おのれ一人の責任にしようと思腹をくくっていたのである。

普照は、役人の監視が厳しいから、同行する事をやめました。

## いよいよ渡航決行

その年の11月11日阿部仲麻呂ら3人は揚州に入り、鑑真を尋ね、鑑真に今迄の経緯を話しして、鑑真が自らの意志で出国してくれるなら、準備は調っていると直談判（じかだんぱん）したのです。

鑑真はこれに答え、弟子その他二十四人と共に、渡海する事を決断していただきました。

思託は大伴古麻呂に三日前まで揚州城内に泊まっておりましたが、警備が厳しくなっている事を告げると、大伴古麻呂は思託に「班を六人ずつで四班に分けよう。それぞれ別行動し、泊まる場所も分けるようにしましょう。信頼のおける僧を班長に決めたらどうか」相談し、「第一班の班長は思託で龍興寺(りゅうこうじ)に、第二班の班長は法進で白塔寺に、第三班は儀浄(ぎじょう)で興雲寺に、第四班は如海で延光寺に、それぞれ泊まってもらおう」事にした。

「明日は、一人ずつ別れて、回り道をして警備を振りきって、それぞれ決められた寺に入って下さい。寺に長居は無用。一泊し翌日、遣唐使船に来られたし」と大伴古麻呂は用心して指示しました。

鑑真が出国しようとする事を嗅ぎつけた揚州の当局が、遣唐船の搜索に入るという情報が、もたらされたのです。探して見つければ問題となるし、仮に出発出来ても唐に吹き戻されれば見つかってしまう、そう考えた、大使藤原清河は、第一船の、自分の船に、乗船していた、鑑真たちに下船を命じました。

日本の官僚のやりそうな事だ。

その時、豪胆（ごうたん）な副使**大伴古麻呂**が、独断で**鑑真**一行をひそかに第二船に全員を収容して、そ知らぬ顔をしていた。

当日は、役人たちの対応を、**大伴古麻呂**と**思託**で行った。

**思託**は、『**鑑真**和上一行が日本国遣唐使と共に天台山を訪れ、開元寺にて共に奉納することを許可する衛尉卿（えいいきょう）（警視庁長官）**朝衡**(ちょうこう)』の訴状と『**鑑真**和上殿一行の天台山来訪を熱烈歓迎する。早春の涅槃会で共に入滅を追悼することを欲す。天台山開元寺の僧主(そうず) **円空**』の訴状を見せ危機一髪で**思託**の用意が見事に実った。第1次の計画の時に、**李林甫**が用意してくれた公文書が役に立ったのであります。

その時、役人と同行していたのは、**如海**であった。

和上の日本行きに反対し、それを阻止しようと働いていたのは**靈祐**と**如海**だった。

**靈祐**は**鑑真**の身を案じての純粋な行動で、**如海**は新羅の回し者で金のためであった。

これは11月15日の夜の事でしたが、その三日前の11月13日、**普照**は明州から来て、第三船の副使**吉備真備**の船に乗り込んでいました。

**安部仲麻呂**は第二船の**大伴古麻呂**の船に乗る予定であったが、第二船には、僧の十八名が乗船したため、やむなく、第一船に、乗船した。これが、運命の別れ道であった。

**普照**は、この時点で**鑑真**が乗船したかの事実をおそらく知っていたと思われる。

## 沖縄到着

753年**鑑真** 66歳十一月十六日四隻の船は船隊を組んで蘇州黄泗浦（こうしほ）を出航した。

第一船 **藤原清河**・**安部仲麻呂**らは二十一日沖縄に着いた。

第二船 **大伴古麻呂**副使僧の十八名が乗船と**鑑真** 二十一日**沖縄**に着いた。

第三船 **吉備真備**らも二十日に**沖縄**に着く。

**沖縄**では、**藤原清河**は、先に和上たちを下船させたはずの**鑑真**たちが、第二船から出て来るのを見て苦笑いした。**普照**は狂喜しました。

遣唐船の船隊は**沖縄**で、風待ちと船の修理十五日間停泊していた。ここで、僧たちの一部を第三船の**吉備真備**の船に分乗させました。

遣唐船の船団四隻は、無事に**沖縄**までは着きました。

第一船は**沖縄**を出航し間もなく暗礁に乗り上げ動かなくなりましたが、自力で再度出航したが、ベトナム北部まで流された後、現地人の襲撃により乗員 180 余名の大半が殺害され、生存したのは大使の**藤原清河**と**阿倍仲麻呂**をはじめとした**十余名**だけであるが、この2人はその後、奇跡的に無事に**長安**に戻ることが出来たのは 2 年後の 755 年のことであったが、しかし、二人は二度と、**故国日本の地を踏む**ことはなかった、もし、**鑑真**ら一行が、最初の計画通り第一船に乗っていたら大使らが恐れた事態になっていたでしょう。

第二船の**鑑真**・**法進**らの乗った船は、出航して種子島に向かう、翌日、屋久島に着く。

第三船も屋久島に着いた。屋久島で、風を待つ事十日間。

第二船は十二月十八日屋久島を出発すると、翌日また激しい風雨で視界がきかず、昼頃にただ波の上に山の頂を見たのは**野間岳**（標高 591m）で有った、十二月二十日の正午頃第二船は、どうやら日本の港に着く事が出来ました。

着いた先は、淋しい漁村の薩摩国阿多郡**秋妻屋浦**（秋目）であった。（現在は、**鑑真**和上記念館が有ります、詳細は DVD に有ります）



鑑真和尚記念館



記念館内には鑑真和尚の坐像



この岩場に漂着したとの事

**第三船 吉備真備の普照**の乗った船も12月7日に屋久島に着き、その後、紀伊国牟漏崎（むろのさき）（潮岬）に着きました。

**第四船 布施朝臣人主**（ふせあそみひとぬし）沖縄を出航して、途中で船の火事に遭うなどのアクシデントに見舞われ、**754年4月18日に薩摩国石籬浦**（いしがきうら（指宿と枕崎の中間））にたどり着いた時は、蘇州を発ってから150日以上が過ぎていた。

**鑑真**が目指したはるかなる旅はこうして終わったのです。

第一次計画から振り返ると、参加者のうち、三十六人の同士が亡くなり、二百人余りが脱落して去っていたのです。終始一貫して変わらずに、日本に到着したのは、**鑑真・思託・普照**の三人だけだった。

### 日本での鑑真和上

**753年12月20日**唐から同行した**延慶**（通訳）の案内で秋目からは恐らく、船で有明海に入り、肥前の、鹿瀬（かせ）付近に上陸し、筑後川を経て大宰府へ向かい、**大宰府**に到着したのは、年も押し詰まった**12月26日**のことでありました。

年が変わって754年1月12日北九州を発ち、船で瀬戸内海を通り、**2月1日**に難波津に着き3日河内に入る。

鑑真を待ち受けていた朝廷の歓迎振りは、一通りではありませんでした。

**崇道**（すどう）・**法義**・**道璿**・**善談**らが挨拶しながら出迎えに来た、同じ日に、**志忠**・**賢環**（けんよう）・**暁貴**ら三十余人の僧が尋ねて来ました。

翌四日は平城京入りで、斑鳩（いかるが）あたりの平群（へぐり）駅で休んでいた一行は入京します。京の南門、羅城門に着くと天皇の使わした、**安宿王**（あすかべおう）が出迎え、慰労された一行は**東大寺**に入り当面の滞在場所としました。

**良弁**が東大寺の大仏（盧舎那仏）の前に皆を案内し『これは聖武天皇が、天下の人々を勧誘（かんゆう）して、お造らせになった金銅の像で、高さ五十尺あります』と説明した上で『唐にはこれほど大きな像はありませんでしょうか』質問を投げかけました。

五日には**道璿**や**菩提僊那**らも訪れた。道場につかえる、僧たち五十人も集団で来た、高官達も続々と訪問して来ました。鑑真の来日は、**それだけ待ちに待ったもの**だといえるでしょう。

この月、**仏舍利**、並びに**西国**の**瑠璃瓶**（るりびん）・**大小王真跡**（しんせき）等を**内裏**（だいら）に献上しました。

**第三船**は、三月には紀伊国牟漏崎（潮ノ岬）に漂着、帰国し**吉備真備**が無事に帰国の挨拶を兼ねて訪問しました。

鑑真は、聖武天皇から授戒と戒津の**伝習**に関して一任を受けました。

戒壇に、のぞんだ僧名と日本に来ている戒律の師名を**法進**に作らせました、**法進**・**普照**・**雲静**・**思祐**・**義静**ら五名を告げた。正式な具足戒の授戒が出来るか、確認のためであった、半月後に**思託**・**延慶**を含め七名を資格ありと認めました。

鑑真は忙しい日々でありました。

四月の初め大仏殿の前に戒壇が築かれ、鑑真による**受戒**が始まりました。戒壇は臨時的なものでしたが、

大仏がその役割を果たしたと考えられます。大仏は正式には盧舎那仏と言われ、盧舎那仏は大乗戒を説く『梵網經（鳩摩羅什訳）』の主人公とも言える仏様です。

754年4月、東大寺に仮の戒壇をもうけ、最初に授戒したのは、伝戒師の来日を待ち望んでいた、聖武太上天皇でした、その後に光明皇太后と娘の孝謙天皇が続きます。三人は授戒を受け直しました。

聖武天皇夫妻と孝謙天皇の授戒に引き続き、沙弥の証修（しょうしゅう）ほか四四〇人余りが授戒しました。

755年鑑真 68歳 5月1日には天皇授戒の壇の土を移して、大仏殿の西に戒壇院を造り10月東大寺戒壇院が完成し、10月には落慶の法会が行われた。

鑑真と良弁は唐から持ってきた珍宝を内裏（だいら）に献じました。

如来の肉舍利三千粒・西国の瑠璃瓶（るりびん）・念珠の菩提子三斗・青蓮華二十茎・玳瑁（たいまい）（べっこう）の曇子八面・玉貫（？）の手幡八条・王羲之の真蹟行書一帖・王献之（おうけんし（王羲之の7男））の真蹟（しんせき）三帖などが有る。又、数多くの経典は、写経されて行く。

ここに於いて、鑑真・栄叡・普照らが長年の間苦勞して、貫徹（かんとつ）に勤めた第一の目的は、やっと果す事が出来ました。

東大寺の戒壇院は。

正式な戒壇とは鑑真の祖師の道宣の考えで戒壇の形状に基づいている、東大寺の戒壇は三重の壇の上に多宝塔を据付、内部に釈迦と多宝の二仏を安置する形式です。多宝塔には舍利を安置しました。



754年聖武上皇は鑑真から戒を授かり、翌年、日本初の正式な授戒の場として戒壇院を建立した。大仏殿西側の戒壇院は1732年再建されています。



四天王像、右持国天、左増長天、右広目天約 左多聞天約で守られている。

### 興福寺の僧たちの立場

興福寺の僧達は、沙弥が具足戒を受けて僧になったが、今迄に、僧として活動していた人たちは、すでに受けた戒はどうなるのですかと、興福寺の講堂で対決が始まりました。

今迄の僧たちから拒否反応が起き、今迄の授戒は、自誓（じせい）作法といって自分で仏に戒を守る誓いを立てるだけあったし、師僧から受ける場合でも、三聚淨戒（さんしゅじょうかい）とか七衆戒とかいう不完全な授戒であったため、思託は、此れに応じて『諸戒は自誓受戒をゆるすが、ただ声聞律儀（しょうもんりつぎ）のみは自受ゆるさない。もし自受をゆるすならば、かくの如きの、律儀は、すべて規範がなくなるのではないか』と難詰（なんきつ）した。此れに対して、反論はなく、僧たちは鑑真の戒を受けました。声聞戒とは専門の僧侶となるための戒であり、具足戒の事でありませう。

鑒真の来日から二年後には、日本の僧たちにも**歓迎される**方向に変わってきました。

755年鑒真 68歳 10月東大寺戒壇院造る。東大寺の北に僧房を建て、鑒真ら唐僧は、皆ここに住む事になった、これを**唐院**、または**唐禅院**と言う。

鑒真たちより先に来日した、**道璿は僧綱**（そうごう）を辞し、吉野の比蘇山寺（ひそさんじ）に退隱した。

756年鑒真 69歳 鑒真たちを大歓迎した、**聖武天皇**、五月二日亡くなる。

5月24日鑒真、大僧都（だいそうず）に任ぜられる。法進が津師となり、6月に、鑒真は天皇より米・塩をたまう。7月には聖武天皇の遺物を東大寺大仏に献上しました。

758年鑒真 71歳 8月1日、**鑒真僧綱**を辞し、**大和上の尊号**を賜う。鑒真の弟子の**法進**が津師の地位に留まり、東大寺戒壇院の和上となって後を継いだのですから、**鑒真は実質の引退**です。

759年鑒真 72歳 鑒真は、平城京内に、**新田部新王**の旧宅を賜り、8月1日、**唐津招提**（唐招提寺）を創建します。

### 鑒真のエピソード【恵美の辻】

鑒真が来日の後に、生駒山を超え奈良に入る途中、行く先々で土を噛んで香りを嗅いでいたのですが、薬師寺の北、のちの唐招提寺の西に当たる処に来たとき、同じ様に土を噛んで香りを嗅いでいたしていた鑒真が、思わずほほえんだ、弟子たちが理由を尋ねると、鑒真は、今まで嗅いだ土にはまったく戒律の匂いがしなかったが、ここで初めてその香りに出会った、この場所こそ戒律を伝えるのにふさわしい、それで、自然と笑みがこぼれた、と答えました。その後、この地は、『**恵美の辻**』と呼ばれました。

唐招提寺は、初めは、鑒真の希望によりの、私寺で始まったが、後で政府の許可を得て、『私寺』から『官寺』となります。

### 東大寺戒壇院から唐招提寺に受戒の場を移した理由

戒律を学ぶ意欲に燃えながら、生活の資金が続かない為に、挫折していく僧が少なくなかったためと、受戒後に、僧たちのちの研修や教育の場所にした事と、受戒者が増えて来た為と、律を学ぶための専用の施設を**唐禅院**や**戒壇院**の持っていた機能を分離、**独立**させ、唐招提寺に場所を移して行われる事が、唐招提寺の構想でありました。

唐招提寺の財源は、天皇から与えられた、備前の国の水田百町で運営していたが、唐招提寺の造営とは関係なく、授戒や戒律の研修のため、集る僧たちを養うのが本来の役割で、生活の保証がないため帰って行く僧が少なくはなかった事を聞き、天皇が、田を寄付しました。

『**四分律**』の授戒後、**5年間の修行を義務**付けているので、**集団生活**の中で身につける修行がいります。これまで、日本には、正式な具足戒の受戒すら無かったが、その実践修行の場が、ここで初めて開かれました。鑒真の主導で、それが実現したのです。

中国でも『招提寺』と名付けられた寺が六世紀には、幾多と建てられています。意味は、各地から集った僧たちの住む所。趣旨（しゅし）は『**十方僧の為め、招提寺を建立す**』と記されています。

**唐招提寺**の創建の理由と、まったく**同じ**です。日本ではこの様な目的での寺院が造られたのは、かつて有りませんでした。中国では私的な寄付で建てられる事が多かった。

**唐招提寺**の『唐』とは、唐の僧たちが多く住んだ事から付いている。『**招提**』とは、各地から集った僧たち、全員が一致した僧集団生活を営み修行する場です。

760年鑒真 73歳頃に、隆尊 55歳・道璿 59歳・光明皇太后 60歳で亡くなり、奈良時代の前半期の仏教界の中心人物は、凋落（ちょうらく）していった。

763年忍基が鑒真大和上の肖像を作る。

763年春頃から大和上の健康がすぐれなかった事により、弟子の**忍基**がある夜に、唐招提寺の講堂の棟梁が砕け折れた夢を見た、忍基は、大和上の死が遠くない事を覚り、多くの弟子たちをひきいて、鑒真の肖像を作りました。国宝『**鑑真和上坐像**』です。



秋目の鑿真記念館の像



国宝『鑑真和上坐像』

763年五月六日、鑿真は日頃、思託に遺言していた通り、招提の宿坊で結跏趺座（けっかふざ）し、西を向いて足をキチンと組み、座ったまま息絶えたと言います。

これは、菩薩の境地にいる人だけが可能な、理想的な亡くなり方でした。又、祥彦も同じでありました。また、鑿真の遺言は【如、我が為に、戒壇院に於いて別に講堂を立て、旧の住房は僧に与え住まわしめよ】戒壇院に影堂を建て、像はそこに移し、自分の住んでいた房は、僧たちに住まわすとの事だったのは、一人でも多くの僧をと考えたのでしょう。

鑿真の人生は波瀾の多かった七十六年間の生涯をここで閉じました。

思託を始め弟子たちは、肖像を遠ざけてしまう事に気が進まなかったので、肖像はそのままにして、もとの住房に安置されました、以後この場を『大和上室』と呼ばれるようになりました。弟子たちは、あたかも鑿真が在世しているかのように、お仕えしたとの事です。

鑿真が死んで三日たっても頂きに、なお体温が感じられたので、久しく葬らず、のちに火葬に附した時は、香気が山々に満ちたという。

鑿真の仏教は天台宗の人間観を土台にして、南山宗・相部宗の津学をあわせるという大きな広がりを感じたのであります。

鑿真が、残したものは、それ以外にも、寺舎の造設・菩薩像の制作・数多くの写経。衣食提供・病に苦しむ貧しい人々を救う事業など多彩な社会貢献をし、又、得度や授戒の人数は4万人とも言われています。日本での鑿真の活躍ぶりは、一言では言えない、大変な活躍で有りました、また、鑿真の仏教志想は、1200年以上の歳月を経て、姿を変えてはいますが、鑿真なくしては、今日の、日本の仏教界、及び、文化は、存在しないと、言っても過言では無い。754年4月18日から763年五月六日、11年間の日本での大活躍でありました。

### 鑿真が伝えた物

将来品の明細は、

- 1、食料その他の日常品 米・味噌・麵・乾かした餅頭・銅銭・麻靴・天笠・草履（ぞうり）編み笠・役人等の頭巾
- 2、経典・経箱 消耗品、実用品などです。
- 3、仏像『華嚴経』『大涅槃経』『大集経』『大品経』は鑿真が『四大部経』を重視していた。『四分律』六十巻や、『四分律』に関する注釈文（法礪・定賓・靈祐・大亮・懷素）道宣の『戒本疏』『四分律行事鈔』『羯磨疏（かつましょ）』『戒壇図経』玄宗の旅行記『大唐西域記』・天台大師智顛の三大部『摩訶止観（まかしかん）』『法華玄義（げんぎ）』『法華文句（もんぐ）』鑿真がまとめて請来した。これが、日本天台宗が開かれるきっかけとなりました。

その他に

- |                           |     |
|---------------------------|-----|
| 1・王右軍（おうゆうぐん）の真蹟（しんせき）の行書 | 一帖  |
| 2・小王の真蹟（しんせき）の行書          | 三帖  |
| 3・天笠（てんじく）・朱和等の雑体の書       | 五十帖 |
- 1.2.は王羲之と、その子供の王献之（おうけんし）の直筆帖仕立てにした貴重な書物（鑿真が海南島からの上京時の授戒の礼に鍾紹京（しょうしょうけい）が贈った物）3・はインドを始めとする中国以外の民族の文字を集めた本。

**仏像・五頂像**（師匠から渡された師匠の肖像）・千手観音像、密教系の像・阿弥陀如来の画像や彫像（ちょうぞう）

（鑿真は浄土信仰を語る証明）・金漆泥像（きんしつでいぞう）はインドでは型に泥を押し付けて大量に作る埴仏（せんぶつ）。白檀を彫った像や、刺繍（ししゅう）の像。仏像は小型である。

4・仏具・調度 法要で使う各種の幡（ばん）、座具となる氈（せん）（敷物）・蓆（せき）（むしろ）・千領にものぼる袈裟・衫（さん）（上着）・座具・供養に使う食器（材質は銅やべっこう）・菩提子（数珠を作る菩提樹の実）三斗・西国の瑠璃瓶（さいごくるりへい）（ガラス製の瓶）（唐招提寺に伝わる仏舎利の器）・仏舎利は三千粒（実際は貴石やガラスがほとんどで遺骨が変化した物で信仰上は決して偽者では無い）二千粒は朝廷、千粒は唐招提寺に献上した。

5・香料・薬物は西アジア・南アジア物を中心に多種類に渡るもので、これらは法会に無くてはならない品で貴重な薬でもある。この時代は、香料・薬物は区別が無い。大変な経済価値があったし資金もあった。

### 鑿真が連れてきた工夫

玉作人（ぎゅくさくにん）—ガラス工芸の工夫

画師 画家

彫壇師（ちょうだんし）—白檀などの彫刻の工夫

刻鏤師（こくるし）—金属に彫刻を行う工夫

鋳師（ちゅうし）—鋳物工夫

写師（しゃし）—書物なども写す職人

繡師（しゅうし）—刺繍（ししゅう）の織人

敷文鐫碑工（ふぶんせんびこう）—石に文字を彫る工夫。

日本の木彫刻像は高級な白檀からカヤの木で大量に作られるようになり、のちにヒノキと変わって行いました。

### 医療を行う鑿真

鑿真は視力を失っていたため薬の真偽（しんぎ）を鼻で嗅ぎ分けていた。

『医心方』『鑿真方』という処方集が引用されている。日本では和上を医事の祖と言われています。

鑿真は徹頭徹尾、実践と行動の人で自分の著作というものを残さなかった人であります。

### 鑿真死後の、その後の弟子たち

唐招提寺の金堂は、鑿真の死後しばらくたってから、如宝らによって完成されました。

東大寺戒壇院の鑿真の後を継いだのは、法進で仕事を取り仕切り、唐招提寺は思託に任せました。

如宝は鑿真の死によりその委嘱（いしょく）によって唐招提寺に戻って住し、伽藍の造営と律宗の高揚（こうよう）に尽力しました。

最初に鑿真が目視されていた戒律の研修場から普通の寺院へと性格を変えていきました。

盧舎那仏だけ祀っていた金堂だが如宝により東大寺の盧舎那仏本尊を、東に置かれた、下野薬師寺（栃木県下野）の薬師如来は西に置かれ、大宰府の観世音寺に千手観音がおかれている、此れを、**本朝三戒壇**と総称（そうしょう）されるようになりました。

中国の各地に鑿真和上まつわる物が建てられています、揚州大明寺の直ぐそばに、**鑿真記念堂**や日中交流をになう『鑿真学院』を筆頭に**五箇所**をくだらないと言われています。

栄叡が亡くなった広東省端（たん）州には、栄叡の記念堂が建立されている。

普照は京に街路樹として果樹を植え、日本最古の街路樹の始まりです。

唐招提寺には、『唐招提寺』と大きな板に彫られた当時の額があります、この額のもとの書は、中国の書聖の王羲之の書を習った、よほどの書き手によるものであります。

唐招提寺の当時の鷗尾は、唐から送り届けられたものです。

唐招提寺の毘盧舎那仏は義静（ぎじょう）の作で有ります。

**菩提僊那**（704～760年）鑑真和上、唐から日本に渡り後に帰化僧となった方です。仏教とは無縁な方でも、鑑真和上を知らない人は居ないと言っても過言では無いと思いますが、日本の仏教を語る上で、大切な僧侶で、唐の国から日本に渡来された僧侶は数多くいますが、インドから日本を訪れた僧侶はただ一人、それが**菩提遷那**です。36歳で来日し、東大寺盧舎那仏像の開眼供養の導師をつとめています。760年2月5日に大安寺にて鑑真と同様、**結跏趺座**（けっかふぞ）して、56年間の人生を閉じています。

## 日本の天台宗の始まり

元々は、中国浙江省に有る、天台山で慧思によって、国清寺で天台宗が開山され伝えられた、**実質的開祖**の**智者大師智顛**により確立し広められ、そして日本は、鑑真により伝えられ、最澄により、日本天台宗が確立されました。

**最澄**は鑑真の弟子の**法進**に具足戒を受けた、法進は、鑑真が来日した時、持参した天台の三大部を『天台大師の著作は手元にある、学びたければ写して良い』と言われ、最澄は天台大師智顛の著述を学び、鑑真の天台宗を日本に根づかせた。比叡山の天台宗により、大乘仏教の本筋である事を受継ぎ、法然上人・親鸞聖人と受継がれ、今日の、浄土宗・浄土真宗があるのであります。

**第18回遣唐使**（804年）で同行した、**最澄・空海・靈仙**（りょうせん）らがいます、その中で、**靈仙**（759～824）は日本で三蔵法師と言われた人は、彼だけでしたが、でも、日本に帰国する事はなかった。

## 鑑真死後の百年後の姿

唐招提寺の百年後は、希望者を受け入れるだけに過ぎないようになっていた、授戒は官僧に資格を認める手続きになっていきましたし、当時の官僧は民衆を救おうとはしない僧達でありました。

日本には、たとえ不完全にせよ、鑑真が志す僧団は成立しなかったのである。**慧運**が言うには、古いやり方が忘れられていたし、沙弥になれない14歳以下の少年等が授戒したり、上下関係のみだれなど、鑑真来日後**100年後の状況**で**資格審査**としての**授戒さえ機能**していなくなって行ったが、しかし、鑑真がもたらした戒律は、日本には**根づかなかった**が**鑑真**の志が、別の形で受継がれたのです。

それは、**最澄**の提唱（ていしょう）した独自の戒律、**大乘戒**です。最澄は804年遣唐使として8ヶ月間唐に渡り天台宗学び帰国しました。

最澄は、天台宗を立てるのに、天台宗を専門とする**度者**（どしゃ）（沙弥（得度者）（出家者））を二人出してよいと認められた。**天台宗の公認**です。

東大寺の戒壇院で授戒して正式な僧になれるが、最澄は**これまでになかった授戒の形**を考えた、比叡山に造る戒壇で独自の菩薩戒を授け（さずけ）、それをもって正式な僧になったと認める方式を、最澄は、この戒こそ、大乘仏教に志す菩薩が受ける戒だとして、『**大乘戒**』と呼びました。

東大寺で授けているのは小乗の戒に過ぎず、それは度者が**十二年間**、比叡山から出ずに修行した後、菩薩として小乗を追加して受ければよい（四分律では五年間の研修）のであります。

『**大乘戒**』は**最澄**が**死後七日目**に蘇我天皇によって認められたのです。

天台宗の『**大乘戒**』公認で最澄こそ、日本における**鑑真**の**継承者**であり、みだれた僧界では、**授戒が資格認定の道具**とされていたりしていたが、『**大乘戒**』において確立されました。

**鑑真**が戒律を求めた精神は、かえって純粋な形で、最澄に受継がれ、そこから日本独自の仏教が育った事は、**日本の文化全体**にとって大きな**収穫**でした。

天台宗は日本の仏教諸派の母胎となり、**法然・親鸞・道元・日蓮**に受継がれ、宗教者を輩出しましたが、その**源**に**鑑真**があったことは改めて見直すべきであります。

日本の仏教は、今日では、**本当の意味の戒律を持たない仏教**になってしまっています。僧侶の無戒が当たり前の日本ではまったく気づきませんでした、**無戒が公認**されている**仏教は世界に類**がありません。

この点で日本の仏教がアジアを中心に広がる仏教圏の中では、**大変特異な事**で有るし、**国際基準**を満たしていないという事は、日本人が自覚しておく必要があるのではないかと思います。

**道元**は比叡山で大乘戒を受けただけで、宋へ留学したが、なかなか正式な僧として認めてもらえなかった

のは、日本の僧侶全体に当てはまります。現代での僧の状況に当てはまる『葬式坊主』と同等であると思  
います。

戒律は小乗仏教で釈迦が弟子達によって示され、小乗仏教の戒律は、個人が修行を通じて悟りを開き、救  
われん事を目標としています。大乗仏教では、個人の悟りを求めるだけでは、自分を含めすべての生き  
物が救われん事を目指します。他人のため尽くす行いです。この行いに努め、将来悟りを開いて仏になる  
事を望む人が『菩薩』にほかなりません。

#### 現在の中国での仏教とは・・・

2500年以上過ぎた今日での中国仏教は、迦葉摩騰（かしょうまとう）や竺法蘭（じくほうらん）により、西暦  
68年頃に、白馬寺に、経典を運んで来て、白馬寺で漢尺されたと伝えられ、龍樹・鳩摩羅什・三蔵法師  
など数多くの僧侶により伝えられると共に変化してきた。

儒教・道教から脱皮しながら小乗仏教から、大乗仏教へと変化していきます。

#### 現在の中国での鑒真とは・・・

鑒真は中国国民の英雄では有るが、真の仏教の重んじる考えは無い、6度の渡日をしてまでも、日本に真の  
仏教を、命をおし、志を変えず、密航してまでも伝えた、でも、現在の中国人は、鑒真の渡航は、政  
府の指示で渡日したと伝えられているし、英雄を作る為であり、真の鑒真の心を知らされる事は無い、  
中国人らしい、物の考え方である。

現在の、中国人は儒教・道教の影響を強く受けてから、仏教へと変化しつつ進化して行った。どうい  
う訳か、その後の長い歴史にあって、今日での一般市民は、己の利益や、己の願い事をかなえてくれる、  
仏教と変化している事を感じる。

中国人は孝（自分の親を大切にすること）を第一としている。日本人は忠（まごころをこめて）を第一  
としている。

